



基調講演

「新しい歌をうたおう」

鈴木 光司 ● すずき こうじ (作家)



静岡県浜松市出身、1990年「楽園」で作家デビュー。その後「リング」「らせん」「ループ」の3部作がベストセラーとなった。98年の「少子化への対応を考える有識者会議」委員就任を皮切りに、「少子化への対応を推進する国民会議」委員、東京都青少年協議会委員等を歴任。「父性の誕生」「パパだからできる！」等男女共同参画に関する著書も多く、読売新聞では働く女性の仕事や生活を巡る悩みや相談の回答者としても活躍中。今年度の「ベストファーザー賞」を受賞している。

僕は、「文壇最強の子育てパパ」というキャッチフレーズを自分で勝手に作っています。きょう僕がなぜ文壇最強の子育てパパになったかをお話しすれば、それがそのまま男女共同参画社会の実現へのエールになるのではないかと思います。

「鈴木光司さんは結婚する前から、これからの男性は結婚して子どもが生まれたら積極的に家事、育児に参加すべきだという意識があったのですか」とよく聞かれます。全くそんなことはありません。僕は10年間にわたって、ずっと娘たちの保育園の送り迎えをしてきましたが、どうしてそれだけ子育てに深くかかわったかという、全く偶然でした。たまたま僕がやらざるを得なかったというだけです。

大学に入る前に、将来の職業としての小説家は決定していました。「絶対作家になりたい」と思って大学に進学しましたから、文学部以外は受けていません。そしていったん就職したら、サラリーマンの余暇で小説を書くなんていう道は選ばないで、とにかく作家になるのだと決めました。大学生のときから、塾の先生や家庭教師のアルバイトをしながら、シナリオ・センターに通って小説を書き、皆の前で朗読して発表するという形で作家の修行をしました。大学を卒業するときも、就職をしないで作家修行の道が続けることにしました。いわゆるフリーターの身分でした。

そうした中、卒業後1年経ったときに結婚しました。妻はフルタイムの高校の教師をしていました。結婚して2年目に長女が生まれました。さっき言ったように、僕は作家を目指してアルバイト中という身の上、妻はフルタイムで働く学校の先生。さて、子どもの面倒はどちらが見るべきでしょうか。そこで「しょうがない、僕がやらざるを得ないか」と、子育てを始めたのです。

最初のうちは戸惑うことばかりでした。赤ん坊というものは理不尽なもので、こちらが眠くてしょうがなくとも、急に夜中にワッと泣いてみたりします。妻は朝7時に家を出て行きますから、なるべく妻を起こさないように、夜中であっても僕が抱き上げてあやす。泣き声が大きければ廊下に出る。とにかく僕に何かしたいことがあっても、させてくれないのが赤ちゃんでした。

四六時中、赤ん坊の世話を受け持つようになりましたが、仕事の面では非常にプラスになってきました。僕は学生の頃から小説を書いていました。フランス文学を専攻していたのですが、いくら小説を書いても、いつも読んでいるヨーロッパの大家の作品と比べると、自分の書いているものが話にもならないということが分かってしまうのです。だから、なかなか書くことができなかった。5枚、10枚書いては、破って捨てるの繰り返しで、全然完成しませんでした。

ところが赤ん坊の世話を始めてみると、それまで完成できなかった小説が、だんだん完成できるようになってきたのです。これは多分、生まれてきた子どもと真正面から向き合うことによって、小説で書くべきテーマを発見できたからです。テーマとかモチベーションというものがぎゅっと高くなってきて、それがクリアになって、どこか体の一部から「さあ、書け」という命令が起る。そのエネルギーを感じて書く。表現したかったテーマをずっと指先から出してしまったときに、自動的に終わる。そのテーマやモチベーションが強く、クリアでないと、なかなか小説は完成できません。

子どもからエネルギーをもらって、短いものであってもどうにか小説を完成できるようになってきたのです。10枚、20枚、それから30枚、40枚と、何となく小説が完成できるようになって来た頃から、近い将来プロの作家へのハードルを越えることができそうだな、と思えるようになりました。そしてそんな感じを得たとき、アルバイトをやめて、なるべく小説の執筆のほうに持っていくことにしました。

その当時、塾の生徒も多いときは20人も30人もいましたが、ひとつのハードルを越えて小説で行けそうだ、と思ったとき、塾の生徒の募集を止めていきました。今いる生徒さんを志望校



に入れたら、後はもう募集しないと考えると二人くらいにしました。ですから収入は月に2～3万円、年収にして30～40万くらいと、とても少なかった。多いときは普通のサラリーマン並みの収入を得ていましたけれども、作家へのハードルを越えられそうだった直前には、収入はすごく減っていたのです。その頃の生活はご苦労なさったでしょうとよく言われます。しかし、いくら収入が少なくても、自分でもどんどんレベルアップしていく感覚があったから、非常に充実した時代でした。

子どもはさまざまなものを与えてくれました。人間として、父親として成長しないとなかなか子育てはできません。作家としても子どものおかげで成長させてもらいました。テーマが見つかったのです。これまでの日本の家庭で、お父さんは一体どんな役割をしていたのか。いろいろなことを思うようになりました。独身のとき、あるいは学生るとき、小説を書くには書いても、やはりまだ若過ぎたり人生経験がなかったり、あまり深く物事を考えなかったのが、子どもを持って初めて、いろんな人生を深く考えるようになってきた。その結果ようやくテーマが見つかって小説が完成できるようになってきた。完成できる小説の枚数も50枚、60枚、80枚、100枚、120枚と増えていきました。

忘れもしない1989年の春のことでした。向こうのほうからインスピレーションが一つ、すつとやって来ました。それは500枚でとっても面白いものが書けますよ、というインスピレーションでした。それを信じて、ストーリーがどうなるのか全く分からない状態で、とにかくワープロの前に座って小説を書いていきました。その頃の僕の小説の書き方は、ストーリーとかプロットを一切決めない。10枚先がどうなるのか、全く分からない行き当たりばったりで、どんどん書いていくのです。もちろんラストがどうなるかなんて分かるわけがありません。

その小説を200枚ほど書いたときに、まだその小説にはタイトルが付けられていないのに気づいて、英和辞典をペラペラッとめくってみたら、「RING＝リング」という項目で目がピタッと止まりました。文字が拡大されてくるような感じでした。皆さんもご存じの通り、「RING」は名詞で、丸い輪っかの意味がありますね。それ以外に動詞で「呼び起こす」とか「呼び覚ます」という意味があるのを、そこで初めて知りました。今書いている小説にぴったりだなあと思って、その小説に『リング』というタイトルを付けました。そして後半を書いていくとインスピレーション通り、ちょうど500枚で小説が仕上がりました。

仕上がった小説を当時角川書店が行っていた、横溝正史賞という文学賞に送りました。なぜ横溝正史賞に送ったかという、収入がすごく少なかったからです。妻も学校からそんなに高い給料をもらっているわけではありません。東京で親子3人、それまで貯めた定期預金を切り崩して生活費に充てるような暮らしぶりでした。横溝正史賞に当選すると賞金が1000万円。僕はその1000万円に目がくらんで送って見たのです。

すると3カ月半後に角川書店の編集長から、ぜひお会いしたいと電話がかかってきました。僕はバイクで角川書店の本社まで行って、編集長とお会いしました。すると編集長が『リング』という作品はとても素晴らしいから、編集部としてはこれを横溝正史賞の最終候補3本の中の1本にする、編集部としては、これが一押しですと言ってくれたのです。

最終候補3本の中に入って一押しだと言われたものですから、僕はもう喜び勇んで家に帰って妻をつかまえて、欲しい物があったら何でも言ってごらんと、捕らぬ狸の皮算用を始めたのです。これでもう我が家の家計のピンチは脱出できるし、欲しい物は何でも買ってやれる。

この頃、長女が2歳から3歳になろうとしていました。ぼちぼち二人目の子どもがほしい。ちょ

うど生まれてくる頃には、長女との年齢の開きが3歳から4歳。これからは手がかからないし、いいんじゃないかと、欲しいもののリストのトップに二人目の子どもが入ってきました。

我が家の場合、長女のときに緻密な計画出産をしました。なぜかといいますと、学校の先生の妻は、福利厚生がきちんとしています。産前産後にきちんと2カ月ずつの有給休暇がもらえます。さらに学校の先生には、夏休みや冬休みもあれば、春休みもあります。さて折角いただける夏休みとか冬休み、そして産前産後の2カ月ずつの有給休暇を1日も無駄にしないようもらうためには、一体いつ生んだらいいのか。間違っても夏休みのど真ん中に生まれてしまうと、夏休みと産前産後の有給休暇がオーバーラップしてしまう。ダブったからといって延長してくれません。ではいつ生むべきだとカレンダーを見たら一目瞭然です。10月30日に生むべきだ。

そうすると7月の終わりにはもう、おなかが大きいですから、クラブの顧問といった雑事から一切開放されて夏休みになります。9月、10月が産前の2カ月の有給休暇。11月、12月が産後の2カ月の有給休暇。自動的に冬休みに突入します。年が明けて1月、2月を自主的に休むと、次の年の3月までずっと休みになる。そして僕らが入れる予定であった、港区の区立保育園で預かってくれるのは4月1日。その時点で生後4カ月以上というのが条件でした。10月30日に生まれると翌年の4月1日には生後5カ月に達しています。保育園の問題もクリア、全てクリアというわけです。一番合理的ですが、長女が生まれてきたのは何と10月29日でした。

二人目の子どものときもそうしよう。10月30日に生もうということになりました。長女のときに確認済みですから、いつことを決行すればよいかも分かっています。1月の排卵日です。そうしてお医者さんに行ってみたところ、おめでたです、予定日は10月30日ですとのこと。どんぴしゃりじゃないか。ところが横溝正史賞の最終選考日は、2月2日でした。僕たちはもう完全に先走ってしまい、取ったも同然と考えていましたから、2月2日の最終選考日は結構どきどきしながら迎えました。家にはお金が全く無い。けれども二人目の子どもが妻のおなかの中にいるという状況で迎えたのです。

忘れもしない1990年の2月2日。選考会は銀座で6時から開催です。遅くとも8時には結果が出るので、電話の前でどきどきしながら待っていました。しかし8時になっても電話がかかってこない。8時半になってようやくかかってきました。電話を取ると電話の向こうの声があった。それは落選の通知でした。僕はもう大ショックでした。ちらついていた1000万円が、どこかへ飛んで行っちゃったのです。

皆さん『リング』という小説を読んでくださったり、映画やテレビドラマを見てくださったりして、怖い、怖いと言ってくださいますが、僕のあのときの気持ちのほうがずっと恐怖でした。本当にお先真っ暗という、恐怖のどん底に叩き落されたような感じです。僕にとってみれば大きな挫折かもしれません。

でもそこで落ち込んでいたら、家計のピンチからは脱出できない。僕に出来ることは新しい小説を書くことだけです。2～3日で心をチェンジして、新しい小説を書き始めました。タイトルは最初から決まっていた。『楽園』です。これは1万年前のユーラシア大陸、今のモンゴルの辺りで別れ別れになったカップルのお話しです。女性のほうは、他の部族によってアリューシャン列島沿いに新大陸、今のアメリカに連れ去られます。そして男は、南太平洋を東へ東へと1万年かけて彼女に会いたいという意思を伝えていった。そしてお互いの意思を受け継いだ者同士が1万年後の現代、アメリカの砂漠にある大鍾乳洞の地底湖でようやく再会を果たすという、とてもロマンティックで壮大なラブストーリーです。これも500枚くらいの作品でした。

これを今度は新潮社の日本ファンタジーノベル大賞に送りました。これに当選すると賞金が500万円です。これくらいあれば我が家は2年は食っていけるだろうと、またお金に目がくら



んで送りました。そうしたら、1カ月半後に編集部から電話がかかってきました。『楽園』という小説は日本ファンタジーノベル大賞の最終候補5本のうちの1本ですと。前回に懲りずに、また聞いてしまったのです。「5本のうちってどのくらい有力なのでしょうか。」

角川書店はその当時、まだ角川春樹さんが社長をしており、あまり言わなくてもいいことまでしゃべってしまうような社風がありましたが、新潮社というのはその社名の通り、なかなか慎重な会社で余計な情報は言わない。ですから5分の1の確率かと思って選考日を待っていました。そして優秀賞をいただけることになって、どうにか1990年の夏に念願の作家デビューを果たすことができました。

『リング』が横溝正史賞で落選したときは、相当ショックでしたが、今思うとあのときは落選にしてくれてありがとうという気持ちなのです。何が良かったかと言いますと、まず『リング』とは全く違うタイプの小説、『楽園』を書くことができました。これは非常に大きなことです。作家にとって作品の幅はなるべく広いほうがいいのです。

もう一つ、純粋に数字で表れることがあります。『リング』がもし横溝正史賞をとっていると、角川書店やTBSといった主催者と出版契約を交わさなくてはなりません。『リング』が出版された場合の印税は僕に入りますが、2次的使用権が発生した場合、使用料は主催者側に入るという契約です。それは『リング』が映画化やテレビドラマ化、あるいはビデオ、DVD化など、どんなメディアになろうが、原資料は僕ではなくすべて主催者側に入るということを意味するのです。

『リング』は、のちにテレビドラマ、映画、ラジオドラマ、ビデオ、コミックになりました。今僕は『リング』の著作権を所有していません。所有しているのはスティーブン・スピルバーグのドリーム・ワークで、ここに売ってしまいましたが、70億から80億かけたハリウッド版映画が完成しています。実はきょう試写会なのです。これが終わったらすぐに成田空港に飛んで行ってロスの記者会見に臨み、ハリウッド版『リング』を同じ10月3日のきょう見ます。もし横溝正史賞を受賞していたら、その原資料は僕には全然入らなかったのです。先に1000万円をくれる、でもそれでも全部なしということです。1000万円で済まされていたらたまったものじゃない。実際の原資料を合計したら、その数十倍は楽にいつてしまう。

だから13年前の挫折も今思うと本当に良かったと思います。人生にはこういうことがあるのですね。自分でそういうふうを持っていくというやり方もあることを学びました。

ようやく1990年の夏に作家デビューしたからといって、もちろん僕の子育てはなくなるわけではありません。『リング』は1991年に角川書店からハードカバーで出ましたが、7000部以上は売れませんでした。これは1989年に書いたものですが、最初に出版されたのは1991年です。売れ始めてきたのが1998年くらいからで、文庫は250万部くらい売れました。同時に東宝で映画になりました。それに目を付けたハリウッドによって企画が完成したのが、2002年10月。寿命の長いもので、あのとき赤ん坊を抱えながら書いた『リング』がよく利益を生んでくれるものだなあとありがたく思います。あの頃が懐かしくなります。

しかし作家としてのデビュー当時は全く売れず、収入としては作家一本ではなかなか生活が成り立たちません。1992年に新潮社から『光射す海』という小説を出しましたが、これも全然売れませんでした。ですから年収にして200万から300万円あるかないか、少ないときは40万円くらいでした。依然として、我が家の家計の基本は妻の給料でした。ですから予定日通り10月30日に次女が生まれてきたときも、相変わらず子育ては主に僕が担当していました。

その頃の典型的な1日はざっとこんな具合です。朝7時に妻が学校に出かけていくと、子どもたちの世話が始まるのです。まず子どもたちに食事を与えて、保育園に持って行く布おむつや着替えを用意する。そして9時になると保育園に出かけて行きます。

一番どきっとするのは、朝起きて娘の体に触れて熱かったときです。保育園は基本的に38℃以上熱のある子どもは預かってくれません。その頃の僕にはもう体温計は必要ありません。パッと触ると37.6℃とすぐ分かるような感じでした。でもそれくらいの熱だと迷うのです。朝37.6℃あると、その日の午後には大体38℃を越すということは分かっていました。でも仕事がたまっている。保育園に行ってくれないと仕事ができない。



ものすごく寒い冬の日。北風がビュンビュン吹く中、なるべく薄着にして自転車に乗せて、冷たい風にあてたら熱が下がるかなあ、なんて期待して連れて行ってしまいます。連れて行って計ってみると37.8℃くらいに上がっている。それでも連絡ノートには37.4℃くらいなんて書いて、元気ですよと置いてくる。さて午後には必ず呼び出しをくらうだろから、やるべき仕事をざっと済ませておきます。案の定呼び出しがあって取りに行く。それから子守りが始まります。

子どもが二人いる場合、一人が風邪をひいて熱を出すと、直った頃に必ずもう一人にうつっていきます。ですから二人が元気良く保育園に通えるようになるには、大体1週間が必要になります。子守りだけに専念すると、たった1週間だけでもとてもストレスがたまりました。朝7時に出て行く妻がうらやましくてしょうがない。妻に向かって愚痴の一つも言いたくなる。お前はいいよなあ、外で働けてと。

ところが妻は、「私が一家の稼ぎ手なんだから」などとは言いません。逆に「私がこうやって外で働けるのも、あなたが一生懸命子どもの世話をしてくれるから。本当に感謝しているのよ。」なんて言われると、にっこり笑って「行ってらっしゃい」と送り出すしかありません。

一般の家庭のように、お父さんが外で働くサラリーマン、そしてお母さんが家庭を守る専業主婦の場合。時々お母さんがお父さんに向かって「あなたはいいわよね、外で働けて」などと言ったとき、お父さんが「誰のおかげで食っていけると思っているんだ。お前なんかいつも家で子どもと遊んでいられて楽じゃないか」なんて言えば、お母さんのストレスは高まっていきます。同じことをしていても、パートナーからどんな言葉をかけられるかによって、子育てのストレスは、上がったりがったりなのです。時々立場を入れ替えてみると、相手の立場が本当によく分かります。偶然始めたことですが、僕はその点運が良かったと思います。

僕の両親は浜松に住んでいます。東京から浜松までは約250 kmと手頃な距離です。うちの母親は孫の世話がしたくてしょうがないから、病気になるのを待っているほどです。病気になったら「さあ、私の出番よ」と虎視眈々と狙っているのです。ところがうちの母を呼ぶと、僕は楽になりますが、気詰まりになるのは妻です。ですからなるべく母は呼ばないようにしています。できることは全部自分でやろう。それでも無理なときは母親を呼ぼう。そうすると母は喜んで浜松から飛んで来て孫の世話をしてくれます。

この母は電電公社を退職するまで勤め上げた、キャリアウーマンの走りみたいな人で、ずっと働きながら家事、育児をしてきました。僕は子どもの頃からその母の姿を見ていましたから、僕の家事は本当に早いのです。けれども雑。これは母親流です。どのくらい雑かというと、たまたま母に手伝いに来てもらったときです。まだ長女が赤ちゃんのとき、手掴みでガツガツと食事を



とっていた。妻は洗い物をしていました。うちの母が台布巾で食卓を拭いていった。そのあと何を思ったか、その台布巾でフローリングの床を拭き始めました。僕は「あちゃ、床も拭いちゃった」と思ったのですが、母は雑巾と化した台布巾でまた食卓を拭き始めます。その辺から妻は食器を洗っている手をピタッと止めて、ちらっ、ちらっと後方を見るようになる。長女はあいかわらず顔中食べかすだらけ食べている。すると母は「あんた、顔汚いわね」って雑巾で顔を拭いてしまった。そこで妻はたまりかねて「お母さん、そんな汚いことやめて」と声をたてましたが、とにかく一事が万事そういう調子です。育ってきた環境が違うものですから合わないのです。でも僕はその母親をずっと見て育ってきたものだから、雑巾で顔を拭かれても味噌も糞も一緒、どうせ僕も雑巾で顔を拭かれていたにちがいないと思うくらいのものでした。

とにかく、子どもが熱を出してどうしようもないときは母を呼びましたが、そうでないときは朝9時に保育園に子どもを預けに行き、それからようやく僕の仕事ができるのです。今でもそうですが、午前中は思索の時間と呼んでいます。行き付けの喫茶店で本を読んだり、書いている小説の次の展開を思いついたらメモを取ったり、これを午前9時から11時半くらいまでします。それから近くの商店街で買い物をして帰ると、うどんやそば、あるいはチャーハンやカレーライスを自分でさっさと作って『笑っていいとも』を見ながら食べる。

午後1時半くらいから執筆に入ります。でもいくら筆が乗っていようが、5時半になったら保育園の迎えに行かなくてははいけない。これはもう絶対です。妻から、明日は学校が早く終わるから私が迎えに行くねと言っておいて、やっぱり用事ができちゃったから代わりに行って、と言われたことは100回くらいありました。でも僕が妻の職場に電話をして、お前行ってくれないと言ったことは1度もありません。とにかく10年間というもの、朝9時と午後5時半は完全にフィックスです。

僕はオートバイが大好きです。でも1泊2日のツーリングに行こうと思ったら、まず妻に謝って、それから母の都合を聞いて手伝いを頼んだうえでないと行けなかった。今思うととても不自由だったかもしれませんが、当時はそれが普通だろうと思いました。

それで5時半になると、雨が降ろうが、槍が降ろうが、僕の熱が40℃あろうが迎えに行きます。小説家というのは家でする仕事なものですから、1年の内半分は短パンとTシャツかランニング。Tシャツにしても500円くらいの安いものです。そんなみすぼらしい格好をして迎えに行きます。6月や7月ですと、まだまだお日様は高いです。そんな明るい中をTシャツと短パンのお父さんが保育園に子どもを迎えに行くと、子どもたちは「パパ」と言って飛びついてきます。でも、その娘たち二人がまたパパに輪をかけてみすぼらしい格好をしているのです。

うちの母が浜松の潰れかかった洋装店から、10枚300円で子ども用のTシャツを買ってきたのです。みんな同じ柄で、胸に大きな写真がプリントされていますが、その写真は王選手と長嶋選手が現役で活躍しているときの写真です。恐らく20～30年前のTシャツが倉庫に眠っていて、30円くらいで売り出したものを母親が喜んで買ってきたのでしょう。そんな年代物のTシャツを毎日毎日とっかえひっかえ着ていったものですから、保母さんに「お父さん、お願いですからTシャツを洗ってあげてください」と言われてしまいました。同じ柄のシャツが10枚あると言わないと誤解されるような状況でした。

そんなみすぼらしい格好をしたお父さんが、みすぼらしい年代物のTシャツを着た娘たち二人を連れて帰っていく。汚れ物袋の中には、朝持っていった布おむつが入っている。これをズタ袋に入れて、また朝持っていった衣類が汚れ物袋に入っているものをまたズタ袋に入れて大きなズ

夕袋が二つ。子どもたちをあるときは抱っこやおんぶをし、あるときは手を引き、あるときはバギーや自転車に乗せながら、まだまだ明るい商店街を帰って行きます。こんな格好をした親子3人が八百屋さんに入っていくと、八百屋のおばさんから「お父さん、生きていればいいことあるから」と、ぽ一んと肩を叩かれたりします。あまりみすばらしく見えたのでしょうか、励ましてくれるのです。この不景気で職を失い、女房に逃げられ、子どもの世話だけを押し付けられた哀れなお父さんだと誤解されたのだと思います。でも、そのおばさんは行く度にまけてくれるものですから、とうとう言えずじまいでした。世の中のおばさん方っていうのは、お父さん一人で子育てしていると、すごく優しくしてくれます。

商店街で買い物を済ませて家に帰ると、することが三つあります。夕飯の支度、子どもたちのお風呂入れ、それと洗濯。この三つを同時にしていきます。なにしろ雑で早い母を見て育ったのですから、僕自身も本当に雑で早い。夕飯の献立なんていうものは考えません。考えるから面倒くさいのです。ですから僕は最初から決めておきました。月曜日はカレー、火曜日はうなぎ丼、水曜日はとんかつと。とんかつにしても自分で揚げるなんていう面倒くさいことはしない。お惣菜屋さんで買って来て、後は切るだけ。だからよく妻に、料理を作るといよりも夕飯の準備でしようと言われていました。

カレーは本当によく作りました。子育てしながら作るのにちょうどいいメニューですね。玉ねぎ、にんじん、じゃがいもを煮込みながら、時々かき混ぜに行き、浴槽を洗って湯を張る。今度は洗濯機を回すのですが、一般衣類の洗濯なんてたいしたことはありません。衣類を入れて、洗剤を入れて、ボタンを押せば後は洗濯機がやってくれる。

でも嫌だったのが布おむつの洗濯です。保育園から持ちかえった大量の布おむつは全部汚れていて、それを自分で洗わなくてはいけない。ポリバケツに入れて1枚、1枚洗っていくのですが、時々ウンコが付いているのが出てきて、トイレに流して手で洗う。これはものすごくストレスがたまるのです。子どもにミルクをあげていても、飲んでくれたら親としてはうれしいからストレスなんてたまりません。でもウンコを洗っていると嫌になっちゃう。ウンコを洗いながらカレーをかき混ぜに行くと、手についた黄色いものは一体どっちだったんだろう……。分からなくなってしまうのですね。

本当にストレスがたまるから、ビニール袋に入れて布おむつを捨てちゃったりもしました。でも、そんなことばかりしていると最後にはなくなってしまう。本当に頭に来ると、味噌も糞も一緒と下洗いしないで全部入れちゃったこともありました。ガラガラ回していると、何となくお湯が黄色くなっている。でもまだ洗えるスペースがあるから、妻の真っ白いブラウスも一緒に洗っちゃう。乾くとこれがちょっと黄ばんじゃって。

僕は洗い分けなんて一切しませんでした。真っ赤なトレーナーと真っ白いブラウスも平気で一緒に洗っていました。乾いてみると淡いピンクに染まって、とってもきれい。妻も大喜び……。そんなわけないですけどね。相当怒られました。

そんなわけで三つのことがようやく終わる頃、雑ではあっても食卓には食事が並びます。子どもたち二人はお風呂から出て、もうパジャマを着ています。そして雑ではあっても一般衣類、おむつの洗濯も終わります。だいたいそれが夜の8時くらいです。ちょうど全部終わった頃妻が帰ってくるものですから「お前、お風呂先にする、それとも食事を先にする」と聞くのが僕の役割でした。

保育園の送り迎えは1987年から1997年まで、丸10年間しました。今思うと本当にラッキーでした。もし大学を卒業したあと、大企業か何かに就職して、結婚して、結婚と同時に妻が専業主婦になっていたら、子育てとかかわったのだろうか。絶対にかかわらなかったと思います。あん



な面倒くさいことは全部妻任せにしてしまったに違いない。

子どもと向き合うことができたおかげで、自分の仕事のレベルアップにつながり作家デビューできた。この流れが本当に良かったのだと思います。作家としてデビューする前、僕には時間はたっぷりありました。その時間を子どもに注ぎ、子どもからエネルギーをもらいました。それで小説のテーマを発見して、どうにかプロの作家へのハードルを越えることができました。

同時に二人目の子どもが生まれてきました。今度はダブルでエネルギーを与えてくれました。作家デビュー後も売れていなかった時代、1993年から1995年、足掛け3年に渡って『リング』の続編の『らせん』という小説を書きました。これを書いているとき、長女がテプラという小さな機械で「パパ、がんばって」という言葉をテープに打ち出して、それをワープロの手元にちょこんと張ってくれました。『らせん』を書いているとき、ときどき目を落とすと「パパ、がんばって」という娘からのメッセージが届いて『らせん』を書き上げました。

そして1995年にその『らせん』を発表したところ、これが初めてのベストセラー作品になり、30万部まで売れました。それから僕の仕事は激変してきました。1996年には『らせん』で第17回吉川英治文学新人賞をいただきました。どんどん忙しくなってきました。1997年、『リング』『らせん』の完結篇『ループ』の執筆に取り掛かりました。1998年、『リング』『らせん』の映画が東宝で全国公開されるのとときを同じくして『ループ』を出版したところ、100万部まで売れる大ベストセラーになりました。

ところが1997年は次女が保育園を卒園した年です。翌年、仕事はさらに忙しくなりましたが、長女が中学校に入りました。中学校に入ってしまうと本当に手がかからない。後は父親として、これからの人生で悩みがあったときにいいアドバイスを。いい相談相手になる。もう四六時中一緒にいて何かをしてあげるのはおかしい。ここからは自立していく年齢です。今、長女は高校1年生、次女は来年中学校に入ります。手を離れてしまっています。

この流れも本当にラッキーだったと思います。仕事が順調にっていないとき、子どもたちにたっぷり時間を注いでエネルギーをもらった。そして仕事がステップアップしたときには、もう子どもたちは自立すべき年齢に達している。僕はたまたま小説家という、自分で自分の時間を自由にできる職業だったからできたことなのです。

僕がたまたま経験したこのラッキーな流れを、ぜひ普通のサラリーマンの方もできるようにしていきたい。そのためには企業や、社会全体の意識が変わっていかないといけない。日本では、お父さんの育児休業制度があるにもかかわらず、これを取るパーセンテージがまだまだ低い。企業のほうも、育児休業制度を取ったお父さんが復帰したら窓際に追いやってしまうような雰囲気のある企業は、これから絶対に伸びないと思います。

これからの企業は倫理観がますます問われていきます。雪印、日本ハムの事件のように、ちょっとした不正が許されなくなっています。逆に、企業が非常に進んだ取り組みをしている場合、とても評価されます。

例えばベネッセという教育関係の出版社では、お父さんもお母さんも子育てしながら働ける環境作りに、すごく熱心に取り組んでいます。そんなに大きな会社ではありませんが、大学生からも入りたい企業では必ずベストテンに入るくらい、とても人気があります。すると必ずいい人材が集まって来て業績がますます伸びていく。

これからの企業、社会ではなるべく新しい取り組み——今までのようにお父さんは外で働いて、お母さんは家で家族を守るではなく——、をしてもっと柔軟な考え方をもって、お父さんも、お

母さんも子育てをしながら働く。おじいちゃん、おばあちゃんの手を借りるのは最小限度に押さえながら、夫婦二人で働きながら子育てができる環境に持っていく。これがどんどん進んでいくと思います。そのためにもこういう会が持たれて、意識をどんどん高めていくべきだと思います。

今回の講演のテーマ「新しい歌をうたおう」。これまでの日本人は、なかなか自分だけの新しい歌を歌おうとしなかったように見えます。隣の人もこの歌を歌っているから、自分も同じ歌を歌おうというやり方がすごく多かった。これからはどんどん、新しい一歩を踏み出す勇氣を持たなければいけない。隣の人がこの歌を歌っている。こちらの人はこの歌を歌っている。だったら私は自分だけの新しい歌を歌おうと思う強さが必要ではないでしょうか。

これからの家族の中で、父親だから、あるいは母親だからこうしなければいけない、というモデルを定着させるのは難しいと思います。柔軟に新しい未来に対応できる家族を、それぞれが作っていったら素晴らしいと思います。



▲ 講演のあとで